インフィニットストラトスの斜め上いく物語

コバケイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インフィニットストラトスの斜め上いく物語

【Ｎコード】
Ｎ６４８０Ｒ

【作者名】
コバケイ

【あらすじ】
この物語は基本的に原作のヒロイン達は一夏に好意を寄せています。
ＩＳ学園の平和な日常に突如謎のＩＳが出現！？敵か味方か！
一夏は大切な人たちを守れるか？
オリキャラ、オリ設定盛りだくさんでやっていけたらいいなと思ってます
※わけのわからんことになる可能性大です

プロローグ（前書き）

この物語の一夏とその他のキャラたちは原作重視の形でやっていけたらいいなと思っています。ストーリーはほぼオリジナルだと考えて下さい。

あと、少し箒にきつくあたることがあると思いますので箒ファンのかたはご理解の上でよんでいただきたいです（まだ先のことでしょうが）

誤字脱字の方は指摘いただきたいです。

粗製が作るものなので期待の期の字も持たないでください（笑）

プロローグ

とある研究所
「完成！！やっぱ私は天才だねぇ～」
「自分で言ってどうすんですか」
「そんなことより、どお世界最強のＩＳの乗り心地は」
「最強って」
「私、篠ノ乃束が出し惜しみ無しで作ったＩＳだよ。そこら辺のＩＳと一緒にしてもらっちゃ困るよ～」
「それで、これから相棒となるＩＳの名前はなんなんですか？」
「最強に相応しい名前ってなんだろうね～」
「決めてないんですか？」
「じゃあ、白椿」
「絶対白式と赤椿混ぜましたよね？」
「えーそんなことないよ～」
「もういいです、自分で決めますよ」
「なになに、良い名前でもあるの？」

「『ランスロット』」

「赤式ってのは？」

「聞いてない！（；゜Д゜）！」

「冗談だよ～いいねランスロット」

「それじゃ、最終チェックをしてきます」

「博士～」

「なんだい研究員Ａ？」

「その呼び方はやめてくれませんか」

「わかったよ研究員ａ」

「もういいです。それより動き始めました。」

「思ったより早いね～」

「どうします？」

「少し様子見だね、ランスロットも完成してるし」

「まだ、最終調整が終わってませんが？」

「最終調整なんて形だけ、なんたって天才篠ノ乃束が一から作ったんだから！あ～つかれちゃったよ～一週間くらい休むね～」

「ちょ、まだ二機しかっていない」

プロローグ（後書き）

最初なんでこんなもんで勘弁を（＞＜）
感想頂けたらいいですが期待はしません

第一話・天才は突然に！（前書き）

私初心者です

第一話・天才は突然に！

ＩＳ学園職員室

止まらないスピードで↑着信音

「はい、織むｒ」

「もすもすひねもすー、みんなのアイドル篠ノ乃束だよ～」

「・・・・・・・ピッ」

止まらないスピードで

「なんだ？」

「ちょっと～ちーちゃんいきなり切らないでよ～」

「・・・・・要件はなんだ？」

「ちーちゃんのスリーサイｚ」

「ピッ」

止まらないスピードで

「冗談だよ～」

「今度ふざけたら！」

「わかったよ～それでちーちゃんはさ～、箒ちゃんのことどう思う？」

「篠ノ乃のこと？まだ評価できるもんじゃないな。」

「そうじゃなくて～」

「じゃあなんだ？」

「いっくんの彼女候補として」

ぶっ↑むせた

「なぜ私がそんなことをいちいち気にしなくてはならない？」

「もしかしたら妹になるかもしれないんだよ～」

「そうだとしてもまだ先の話だ、あいつが一人を選べるとは思えんしな」

「じゃあ、このままいったら一夫多妻だ～」

「やめてくれ、想像したくもない」

「なんで～？楽しそうじゃん」

「ついつい話がそれてしまうが本題はなんだ？世間話をするためにわざわざ電話してきたのか？」

「本題ねぇ～・・・なんだっけ？あっそうだ！！思い出したよ～。なんかね～表沙汰にはなってないけど各国のＩＳ研究所が謎のＩＳに襲撃されてるんだって」

「それは初耳だな」

「だから気をつけてね～」

「犯人の検討はついているのか？」

「それが全然、情報がなくちゃいくら天才の私でも難しいね。」

「そうか、しかしそんな貴重な情報簡単に話していいのか？」

「大丈夫じゃない？」

「そうか、それじゃあ私はまだ仕事があるからきるぞ」

「あっ、ちーちゃん」

「なんだ？」

「もし、またＩＳに乗るきになったらいつでも言ってね～」

「その時が来たら・・・・・な。ピッ」

謎のＩＳか・・・・・・そろそろ本格的に鍛えなければいけないかもな。

しかし、このコーヒーは何故しょっぱい？

（そんなの砂糖と塩がぎゃｋ・・・・）

第一話・天才は突然に！（後書き）

本編初投稿ってことで、誤字脱字ありましたら指摘していただきたいです。感想は期待していいですよね？

第二話・騒がしい朝（前書き）

なんとこさできました！

第二話・騒がしい朝

一夏の部屋

チュンチュン

ん～朝かモゾモゾ

「あんっ」

「！？」

な、なんだまたラウラか

「ラウラ何回言ったら」

「ん～一夏ぁ～」

ん？この声は

「シャルっ！？な、なんで」

「一夏が甘えていいって」

上目使い＋猫パジャマで訴えるシャルの破壊力は一夏の思考を止めるには十分なわけで

「あ、甘えるってのは・・・そう困ったときとかのやつ」

突然壁がドッカーン

「「！！」」

そこから箒、鈴、セシリア、ラウラがＩＳと危ないオーラをまとって入ってきた

「い、一夏ぁあ？」

「ちょっと一夏何やってんのよ！」

「一夏さんっ」

「浮気か？」

そして追い打ちをかけるようにドアから

「教師として姉として不純異性交遊は見逃せないな」

「ち、千冬姉！」

「はっ！！」

キョロキョロ

「ゆ、夢か」

ふにふに

「！？まさか・・・・」

恐る恐る布団をめくるとラウラがいた

「なんだもう朝か？」

「ラウラ何度言ったら」

「ちゃんと服はきているぞ？（４巻の猫のパジャマ）」

「うっ」

コンコン

「一夏起きてる？」

「お、おう少し待ってくれ鍵開けるから」

「ラウラが見当たんないんだけど・・・」

（ら、ラウラ早くどっか隠れろ）

（なぜ夫婦であるのに隠れなくてはならない）

（いいからっ）

ラウラをバスルーム突っ込んだ？一夏は鍵を開け

「おはようシャル。どうした？」

部屋を見渡してから

「ちょっと洗面所借りていい？」

「えっ！ど、どうして？」

「部屋の洗面所が壊れちゃっててね」

「洗面所ならトイレにあるんじゃないかなぁ～みたいな？」

「貸してくれないの？」←捨てられた子犬のような瞳で

そこに救世主が

「あ、いたいたデュノアさ～ん」

山田先生登場！

「どうしました？」

「デュノアさんにお電話です」

「電話？」

「はい、デュノアさんのお母さんの旧友と言えばわかると」
「わかりました。すぐ行きます」
ほっとする一夏
「またね一夏」
「お、おう」
シャルと山田先生が行ったことを確認してバスルームを開けると
「ギロッ」
ラウラににらまれた
「日本では夫婦になれば人前でイチャイチャするものだと聞いたぞ」
誰だーーーまたこんな知識ラウラにうえつけたのは～
ドイツのどっかで
「くしゅん」
「お姉さま風邪ですか？」

「誰かが噂してるんじゃないですか？」
意外と平和なＩＳ配備特殊部隊であった

まあ、ＩＳ学園に戻りホームルーム

「諸君、おはよう」

「「「「「おはようございますお姉さま」」」」」

相変わらず息の合ったクラスであった

「織斑先生と呼べ、なんどいえばわかる」

「来週に学年別トーナメントを行う。より実践的にするためにタッグで行う。ペアはランダムに選び出す。以上だ」

ホームルームが終わり皆次の授業の準備をしていた

そのころＩＳ学園上空

「これがＩＳ学園か・・・ふふふ」

「どうした？気持ち悪いぞ」

「ふふふ・・・・・」

場所は戻ってＩＳ学園

「ん？」

「どうしました織斑先生？」

「いやなんでもない」
（いまたしかに視線が）

第二話・騒がしい朝（後書き）

なんかもう序盤でｇｄｇｄですね
誤字脱字ありましたら一言くださいな

第三話・トーナメントに向けて（前書き）

今回はオリ設定盛りだくさんの予定なのでご注意を！（トーナメントに向けての模擬戦全部での話なので今回はあるかどうか）

第三話・トーナメントに向けて

ＩＳ学園グラウンド今まさに修羅場とかしていた・・・・

「赤椿は白式との相性がいい、だから一夏は私と組む！」

「一夏！私とくみなさいよ」

「一夏さんはわたくしと」

「私の嫁だろう？私と組むがいい夫婦とは共同作業というものをするらしいしな」

「い、いや俺はシャルで」

「一夏っ」シャルのテンション？

「一夏さん、毎回同じでは進歩しません！何事も経験です。なのでわたくしと」

「あ～それもそうだな」

「一夏～」シャルのテンション？

「ちょっと待ちなさいよ。一夏私とくみなさいよっ！幼なじみでしょ」

「な、なら、私だって幼なじみだ！」

「私の方が付き合い長いのよっ」

「日本には夫婦水入らずという言葉があるそうではないか」

これ以上いったら模擬戦どころじゃないので

「そうだ、ジャンケンで決めよう」

何故こうなったかは一夏の何気ない一言だった

～五分前～

「これからは来週のトーナメントに向けてけタッグでの模擬戦を行う」

「織斑先生」

「なんだ？」

「それって専用機持ちが有利じゃないですか～」

「今回の模擬戦は勝ち負けではない、あくまでペアとして成り立っているか、連携が取れているか、息があっているかを評価する。もちろん成績に入る。例えかったからといって高評価というわけではない。分かったらとっととペアを作れ」

「「「「「はーい」」」」」

「やっぱいきなりはコンビネーションとれないだろうな～ランダム

じゃ誰だか分からないし
な～」
「そうだ、トーナメントも専用機持ち同士でタッグ戦をしてもらう」
「「「「「え～」」」」」
「模擬戦の成績などをみてトーナメントのタッグは選ばれる」
「模擬戦だからって手を抜くなよ」
「ペアは3日前に発表されるからな」
「3日か～、二人きりでやれば間に合うかな」
「「「「「「二人きり」」」」」」
（最初に一夏とペアを組めばその後も・・・・・）
（一夏さんと二人きり・・・・・）
（ふ、二人きり・・・・・）
（練習後も二人きりで・・・・・・）
（二人きり・・・どんなことをすればいいのだろうか？後でクラリッサに聞いてみよう）
箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラと、考えることは皆同じだったわけで

～現在～

「ズルしないでよね？」

「鈴さんこそ」

「なによ～」

「まあまあ二人とも落ち着いて」

シャルは毎回仲介役

「ふんっくだらない。勝つのは私だ！」

「じゃあいくよ？」

「「「「「最初はグー　ジャンケン　ポン」」」」」

結果

箒　グー

セシリア　パー

鈴　グー

シャル　グー

ラウラ　グー

（ちなみに８回目）

「じゃあ、今回はセシリアだな。よろしく」

「は、はい！一夏さん後方支援はまかせてください」

そのあとシャル箒ペア鈴ラウラペアができた。

「箒よろしくね！」

「ああ」

「・・・・・」

「足を引っ張るなよ」

「あ、あんたこそ」

第三話・トーナメントに向けて（後書き）

次は戦闘ですね。
一夏とセシリアのコンビネーションはどれくらいでしょうね？
感想くださいｍ（＿＿）ｍ

第四話・模擬戦！一夏セシリア対シャル箒（前書き）

やっと戦闘ｋｔｋｒ
たぶん戦闘シーン的なものはあまり文章にしないんで自分で想像してシーンをひろげていってください。読者の数だけシーンがある！

第四話・模擬戦！一夏セシリア対シャル箒

「さて、まず最初は専用機持ちで行う。そうだな織斑ペアとデュノアペア」

「おっ！いきなりだなセシリア」

「ええ一夏さんがんばりましょう」

「箒絶対勝とうね」

「そうだな、セシリアにいい思いはさせん」

「それでは始め！」

「行くぞセシリア！」

「援護しますわ」

一夏が箒に向かって突撃し、セシリアはシャル対して牽制をしているがシャルはイグニッションブーストを駆使して着実に距離を詰めてくる。

一夏と箒は剣ををまじえていた

「はぁあああ」

「くっ」

箒は雨月と空裂の２刀流対して一夏は雪片弐型だが一夏はイグニッションブーストで張り付いて自分の距離を保っているのに対して箒は攻めきれず守りきれずいだが赤椿の桁外れの性能故おしまけはし負けていない。

「ボーデヴィッヒどっちが優勢に見える？」

「はい、ＢＴではシャルロットは抑えきれないでしょう、時間の問題です。赤椿は絢爛舞踏を使えないなら白式の方が有利でしょう。先に落ちた方が負けるかと」

「まあ、そうだな」

セシリアはブルーティアーズでシャルに応戦しているが、高速切替による距離を選ばない戦闘にリズムを崩されかけていた。

「ブルーティアーズ！」

「甘いよっ」

ブルティアーズのビームをシャルは難なく回避した矢先

「かかりましたわ」

ブルーティアーズのビームは赤椿直撃

「うわっ」

距離があったので大したダメージはなかったが隙を作るには十分だった

「おおおっ！」

フルチャージの零落白夜が赤椿のシールドエネルギを一気に削り取り赤椿が膝をついた

「くっ」

「悪いな箒」

「ナイスだセシリア」

セシリアの方を見るとブルーティアーズが膝をついていたその横にシールドピアーズを展開しているシャルがいた。

「一夏これで一対一だ、本気で行くよ」

「こっちもだシャル」

お互いにイグニッションブーストで接近し・・・・・

「やっぱシャルはすごいな」

「そんなことないよ」

「セシリアもすごかったよ、さっきのは本当に気づかなかったよ」

「当然ですわ」

「私と一夏の戦いに水を指して」

「何を言いますか箒さん、これはタッグ戦でしてよ」

「まあま、箒もセシリアも終わったんだからいいじゃないか」

「箒さん、一夏さんもこう言ってるんですから」

「わかっているっ」

「織斑、オルコット、デュノア、篠ノ乃今回の模擬戦は及第点ってとこだな。まあ、思った
以上にどちらも形になっていたがまだ甘い、織斑は攻めるチャンスを見逃すな、オルコットは視野をもっと広くしろ、デュノアは相手に反撃のチャンスを与えないように、篠ノ乃は赤椿を自分のものにすることだ。」

「「「「はい」」」」

「それでは各自ペアと相手が決まった者から始めろ」

「ボーデヴィッヒと凰は４組の専用機持ちと戦ってもらう」

「「「「「えっ」」」」」

第四話・模擬戦！一夏セシリア対シャル箒（後書き）

次回やっとオリキャラを出しますよ！
必見ですよ～
感想いつでも待ってますよ～

第五話・軍事用ＩＳ研究所！？と騒がしいお昼（前書き）

説明とお昼の風景です

第五話・軍事用ＩＳ研究所！？と騒がしいお昼

「教官、どこの候補生ですか？」

「織斑先生だ、何時になったら・・・まあいい、資料があるから読んでみろ」

「みせてみせて～」

模擬戦がいつの間にか資料の回覧会になっていた

～資料～

軍事用ＩＳ研究所極秘ファイル

「ベタだな」

「ベタね」

アシュリー　オードリー

専用ＩＳ【月姫】第３世代

月姫は拠点防衛をコンセプトに作られており火力と防御に特化

機体カラー・白を基調に桜色が混じっている

通常のＩＳより一回り大きい

武装※現在確認してないものもあり

ガトリング・ミサイル迎撃を主に考えられているそのため一発の威力より連射に特化している

シリウス・対ＩＳ前提に設計されており威力は従来のＥＮ兵器をはるかに上回る

ＡＲＡＩＣ・これはＡＩＣの発展型。両肩に搭載されており全方向にＡＩＣの効果を出すことができる（ＡＩＣよりも集中力が必要）。従来と変わらずＥＮ兵器には効果が薄い

シールド・実体シールド４枚ＥＮシールド２の構成。実体シールドは対象物を敵の攻撃から守る事が前提でありＥＮシールドはＡＲＡＩＣのカバーとして機能する。

月光・唯一の近接武器　威力だけなら零落白夜にも引けを取らない

「拠点防衛というだけあって火力、防御が高いな」

「こんなん近づいちゃえば双天牙月の餌食よ」

パイロット

外見・茶髪のサイドテール　女神のような笑顔

身長　１５８ｃｍ

体重　５２ｋｇ

胸囲　Ｃカップ

セレン　ヘイズ

専用ＩＳ【ワルキューレ】第３世代

ワルキューレは単機での強襲をコンセプトに作られておりスピードに特化している

機体カラー・シルバー

武装※以下同文

ファルシオン・最速をコンセプトに作られたＥＮブレード　斬撃の速さは桁違いに早い

アサルトライフル・一発の威力を重視されている

フラッシュロケット・その名の通り着弾時にフラッシュする襲撃か離脱の時の使用を考えられていて常に腕に装備されている　威力は皆無

ジャッジメント・パイルバンカーのこと　ワルキューレのなかで最大の攻撃力を持っている灰色の鱗殻（グレー・スケール）と同型だがこちらは一撃の威力にすべてを注いでいるのでリロードが長い

３連チェーンガン・近接戦で真価を発揮する

「一撃の威力が高い武器構成だな」

「当たんなきゃどうってことないわよ」

パイロット

外見　金髪のショートカット　鋭い目付き

身長　１６８ｃｍ

体重　５６ｋｇ

胸囲　Ｃカップ

～終わり～

「どちらも軍事用としては武装が少ないな」

「そうか、十分だと思うが」

「白式が少なすぎるんだよ」

「ん～そうかな、シャルは追加装備どんくらいあるんだ？」

「２０くらいかな～」

「いいよな～」

「織斑先生」

「なんだ、オルコット？」

「この二人は強いのですか？」

「私もよくは知らんが弱い奴に試験機をまかせないだろう」

「まあ、模擬戦は明日だ。負けたくなければシュミレーションでもしておくんだな」

「「はい」」

場所は変わって屋上

「やっぱ外で食べるとおいしいな～」

「そうですわね。一夏さんサンドイッチを作ってきましたのでどうぞ」

「今日はみんなでみんなの弁当を食べようぜ」

「そうですか、なら皆さんもどうぞ！」

「鈴、セシリアがせっかく作ってくれたんだから」

（くっ一夏～）

（たまには鈴も味わってみろ）

「一夏さんもそう言ってるわけですし鈴さんもどうぞ」

「仕方ないわね～」

パク・・・・・・

「うん、おいしい」

（なんだただのツナサンドか）

「わけないでしょうがぁ～なんでサンドイッチからキノコの味がするのよっ」

（やっぱり）

「セシリア何が入ってるんだ？」

「キノコを刻んでツナに混ぜ込みました。名づけて「和風サンドイッチ」です」

「・・・・・・」

「どうしました？まだまだたくさんありましてよ」

→

沈

黙

←

沈黙を破ったのは箒

「確か一夏、キノコ好きだったよな？」

「えっ」

「そうなんですの？」

「ま、まあな」

「では一夏さんどうぞひとつと言わず全部どうぞ」

「せ、セシリアの気持ちは嬉しいがセシリアの分がなくなっちゃうんじゃないのか？」

「大丈夫ですわ、購買で買ったパンがありますので」

「えっあっそうなんだ、でもパンはとっておけるから夜にでも」

ビリビリ↑袋を開ける音

「もう開けてしまいましたので気にせず食べて下さい」

「セシリアわざとだろっ絶対わざとだろっ！」

「購買のパンも美味しいですわね」

その後、一夏は午後の授業には出なかった。いや出れなかった

第五話・軍事用ＩＳ研究所！？と騒がしいお昼（後書き）

次回は箒得になるかも
設定などでおかしいとこがあったらご指摘頂けたらすぐ直しますんで

第六話・トーナメントのペア発表前夜（前書き）

特になし！

第六話・トーナメントのペア発表前夜

「う～ん・・・・・」

部屋か・・・しかしなんで部屋に・・・・・・・

そうだセシリアの弁当を食べてその後・・・・・・・

「コンコン、一夏起きたか？」

この声は箒か

「ああ、ちょっと待ってくれ今開ける」

ガチャ

「どうした箒？」

「これ」

「プリント？」

「授業の内容だ」

「おお、サンキュウな箒」

「う、うむ」

「まあ、入れよ立ち話もなんだし」

「そ、そうだな」

別室

「どう？」

「問題無い」

「流石特殊部隊ね」

「これくらいどうってことない」

「これで中の様子がわかりますわね」

「静かにしろ、部屋に入ったようだ」

「プリントを渡すだけのはずですわ」

「話が違うじゃないのよー」

（盗聴は犯罪）

一夏の部屋

「抹茶と緑茶どっちがいい？」

「緑茶を頼む」

（緊張するものだな前はここで一緒に・・・・・）

「箒？」

「な、なんだ？」

「いや、お茶」

「あ、ありがとう」

・・・・・・・・・・・

「もう体は大丈夫なのか？」

「まあなんとか」

「あのくらいの味で倒れるなど日頃の鍛錬が足りない証拠だ」

「食べたのか？」

「あのあと全員で食べてみたんだ一口だけ」

別室

「思い出したくもない」

「わたくしも自分で作ったとはいえあれはナンセンスでしたわ」

「うむ、あれは拷問に使えそうだったな」

一夏の部屋

「そうだ一夏」

「ん？」

「明日だなトーナメントのペアの発表」

「たしか夜発表だったな」

・・・・・・

「私はそろそろ戻るな」

「ああ、プリントありがとな」

アシュリーとセレンの部屋

「セレンシャンプー貸して～」

「自分のはどうした」

「気分転換だよ～」

「断る！」

「そんなにツンツンしないでさ～」

・・・・プチッ

「キャッいきなりドア開けな」

カシャッ

「ちょっとー何撮ってるの～ちょっとけ～し～て～」

第六話・トーナメントのペア発表前夜（後書き）

次回はアシュリーとセレンの実力が明らかに！

第七話・模擬戦！鈴ラウラ対アシュリーセレン（前書き）

長くなったかも後gd gdになった

第七話・模擬戦！鈴ラウラ対アシュリーセレン

「あーなんか緊張する」

「なにをそんなに緊張することがある？」

「あったこともない奴といきなり戦うのよ、緊張するわよ」

「戦場では知らない奴と命の奪い合いをするんだぞ？こんなことで緊張などしない」

「あんたと一緒にしないでよっ」

「それに相手のデータをもとにシュミレーションはしてあるなんの問題もない」

「そ、そうよね、軍事用だかなんだか知らないけど代表候補生の力を見せつけてやるわよ」

「それでは模擬戦を始める。準備はいいな？」

「はい、それでは各自ＩＳを展開してください」

「ではいくぞ。足を引っ張るなよ（ソフトな感じ」

「わかってるわよ」

颯爽と甲龍とシュバルツェア・レーゲンがアリーナに飛び出して行った。

「アシュリー、フェンリルを使うのか？」
「うんそうしないと負けちゃうと思うから」
「しかしまだ実験段階で全てがちゃんと動くかわからないのに」
「セレンこそジークフリートシステムを使うんでしょ」
「実践のデータを採れることはなかなかないからなそれよりお前のＩＳはデータ収集用なんだから無理するなよ」
「わかってるよ～」
「それじゃあいくか」
「うん」
ワルキューレと月姫がアリーナにむかって飛んでいく
「月姫およびワルキューレ視認」
「それでは始めっ」
「予定通り先に月姫を落とすいいな？」
「もちろんよ」

「アシュリーもう一度言うが無理するなよ」

「セレンもね」

「先手必勝っ」

鈴は龍咆を展開と同時に月姫に向けてはなった

月姫は難なくそれをＡＲＡＩＣで止めた

ラウラも月姫に絶妙なタイミングレールカノンとワイヤーブレードで攻めるがなかなか守りを崩せない

二人の狙いはまず総火力の高い月姫を落としワルキューレと一対一にならないことだ

ワルキューレのフラッシュロケットは威力こそ皆無だがくらえば致命的な隙がうまれてしまう

それにくわえて斬撃の速度を重視したファルシオン、一撃の威力を重視したジャッジメント

しかしどちらも一対一で真価を発揮するものであり対多数の場合隙が生まれてしまう

それに対して月姫はＡＲＡＩＣと６枚シールドの絶対的防御がある

しかし絶対的防御とはいえ無限ではない

鈴が一定の距離を保ちながら龍咆でワルキューレを牽制

ラウラがワイヤーブレードで月姫の動きを止めた瞬間鈴がワルキューレではなく月姫の背後に回り込み

双天牙月を投げた

「もらったっ」

双天牙月が月姫に当たる瞬間

「甘いよ、フェンリルっ」

突如現れた大型のビット型の兵器が双天牙月の軌道をそらしワイヤーブレードをきった

「なんだあれは」

「ちょっとなにあの大きさブルーティアーズの倍はあるわよ」

ラウラをガトリングで牽制

シリウスとフェンリルで鈴をおいやっていき後退を余儀なくされた

後退した鈴の背後に突如ワルキューレが現れた

「いつの間にっ！？」

「遅いっ！」

ワルキューレはイグニッションブーストでもありえないスピードで

接近してくる
そして一瞬鈴の目の前が光った
（まずいフラッシュロケット）
一瞬閃光が見えた瞬間甲龍が吹っ飛んでいった
そしてアナウンスがながれた
「甲龍シールドエネルギー０」
「代表候補生、一瞬の隙がお前の敗因だ」
「その言葉そっくりかえしてやろう」
「なに！？」
「セレンごめんねーフェンリル２つしか使えなかった」
セレンが鈴と戦ってる間にラウラはアシュリーを倒していた
「専用機ではないとはいえアシュリーを倒すとは流石シュヴァルツェアハーゼの隊長といったとこか」
「負け惜しみか見苦しいな」
「お前はその見苦しい奴に負けるんだよ」
ワルキューレがフラッシュロケットを撃つと同時にラウラもレール

カノンを撃った

弾速の速いレールカノンがワルキューレの目の前でロケットに当たり爆発し閃光がはしった

それと同時に右手のフラッシュロケットが爆発した

「なに！？」

ラウラがワイヤーブレードで腕のロケットを破壊したのだ

「これでお得意の奇襲はできまい」

一気にワイヤーブレードがワルキューレを襲う

しかしそれをすべて回避するセレンだがラウラも匠にワイヤーブレードを操りセレンを追い詰めていく

ワルキューレがワイヤーブレードでバランスを失った瞬間

「これで終わりだっ！」

ラウラがプラズマ手刀で斬りかかった

その瞬間ワルキューレが白い光に包まれた

「なんだっ！？」

【ジークフリートシステム起動】

光の中から全身黒いアーマーに包まれたワルキューレが現れた

「ここまで追い詰められるとは思わなかったが、ジークフリートを起動した時点でお前に勝目はない」

ラウラがレールカノンをワルキューレに向けて発射した

ドーン

直撃した　はずなのにワルキューレには傷一つ付いていない

その瞬間ワルキューレがラウラの視界から消えた

「消えただと!?（レーダーにも反応がない）」

「終わりだ」

声が聞こえた瞬間背後からいきなりワルキューレが現れ

「しまった」

「もうおそいっ」

ワルキューレがジャッジメントを突き出し

「シュバルツェア・レーゲンシールドエネルギー0」

「アシュリー、セレンペアの勝利」

第七話・模擬戦！鈴ラウラ対アシュリーセレン（後書き）

アシュリー弱すぎたかも

第八話・ペア発表！（前書き）

ちゃんと出来るかな

第八話・ペア発表！

「ラウラ、鈴おしかったな」

「あと一歩だったのにね」

「最後のあれはなんだったんでしょうね」

「なんであれ私の力不足だ」

ラウラは悔しそうにいった

「あの速さは反則よ」

鈴も強がっているがやっぱり悔しさが見て取れる

そこえ

「それが実験機と軍事用機の差だ」

突然声がした。そこにはセレンとアシュリーがいた

「なんのようだ？」

ラウラが睨みをきかせながら言った

「いやなに、さっきの模擬戦のことだ。アシュリーは本調子ではなかった」

「私本気だったよ～」
「何が言いたい？」
「月姫を倒したからといて調子に乗るなってことだ。用は済んだ行くぞアシュリー」
「まってよ～」
言うだけ言って去っていく二人
「なんなんだ」
「よくわからん奴だ」
一夏と箒は戸惑い
「なんか頭くるわね」
「なんですのあの態度」
鈴とセシリアは結構頭に来たようだ
「そんなに悪い人には見えないけど」
シャルは、シャルだ

夜になり講堂に皆集まっていた

「集まったな、それではまず専用機持ちのペアから発表する」

講堂が一気に静まり返った

「まずオルコット　凰」

「なんであんたなんかと」

「わたくしこそ願い下げですわ」

「なによ」

「なんですの」

いきなり喧嘩を始める二人

「なんだ、文句でもあるのか？」

「「い、いえなんでもありません」」

二人にかける言葉が見つからない一同

「では、次に行くぞ。デュノア　ボーデヴィっヒ」

「まあ、仕方ないね」

「そうだな」

「よろしくねラウラ」

「ああ、よろしく頼む」

最強ペアが誕生した

「（ということは一夏と）」

「次行くぞ。織斑　ヘイズ」

講堂にいるセレン、アシュリー以外が一斉に

「えぇえええええええええ！？」

「（織斑一夏か・・・・興味深い。）決まってしまったことだしかたないか。」

（確か一組だったな）

「お前が織斑一夏だな？」

「ああ、そうだ」

「今更自己紹介は必要ないな。まあ、よろしくだ」

「よろしく、やるからには優勝しような」

「そうだな」

「次といっても言わなくてもわかるだろうが篠ノ之　アシュリー」

「よろしくね～篠ノ之さん」

「よろしく」

箒のテンションはガタ落ちだった

それもそのはず期待させてからのこの結果だ落ち込まないほうがおかしい

そのあと一般生徒のペア発表も無事（？）終わった

「あと、ペアでの練習は各自で行うこと。以上だ」

第八話・ペア発表！（後書き）

なんとかできた

第九話・一回戦！ワルキューレの真の姿（前書き）

ワルキューレ大活躍の予感？

第九話・一回戦！ワルキューレの真の姿

トーナメント当日

「これから学年別トーナメントを始めます。今回のトーナメントでは・・・・・・・」

１０分後

トーナメント管理の先生（要するに指揮する人）のいらない話が終わり

「それではトーナメントの日程を話す」

「まず学年別に各アリーナで午前と午後に分けて行う。一年だけは午前中は専用機

持ちだけで行う。各自ＡグループとＢグループに別れてもらう。事前に連絡がいって

るはずなので迅速に行動するように」

「それでは各学年指定されたアリーナに移動してください」

「ラウラ行こ～」

「そうだな」

「セシリア行くわよ」

「命令しないでください鈴さん」
「しののののさん行こ～」
「篠ノ之だ」
「難しいなまえだね～しののさん」
「だぁーもう箒と呼べ」
「わかった～じゃあ私のこともアシュリーで」
「わかったアシュリー」
各ペア最終調整のために指定のアリーナに向かっていくなか
「あれ？俺だけ一人？」
「おりむ～ヘイズさん行っちゃったよ」
「えっ！？」
「織斑一夏何をやっていた？ほかのペアはもう集まっているぞ」
「なんで置いていくんだよ？」

「待つ必要がないと思ったからだ」
一夏の問いかけそっちのけでセレンはＩＳの調整に勤しんでいた
「全員揃ったな？対戦表を伝える」
全員が作業を中断して耳を傾ける
「一回戦は織斑・ヘイズ対デュノア・ボーデヴィッヒだ。開始は１０分後だ。分かったな？」
「「「「はい」」」」
「ところでさ」
「なんだ？織斑一夏？」
「その織斑一夏ってのは・・・」
「なんだお前の名だろ」
「そうだけど戦闘中にそう呼ぶのか？」
「そんな面倒なこと」
「（面倒って）」
「だからさお互い名前で呼ぶってことでいいなセレン？」
「まあいいだろう一夏」

「ワルキューレの調整は終わったのか」
「ああ、調整が必要なのは新装備だけだからな。白式はどうなんだ」
「生徒会の人たちがいろいろ手伝ってくれたから完璧だ」
「そろそろ始まるか」
「行くか」
「ああ」

「来たようだな」
「そうだね。じゃあ予定通り僕が一夏、ラウラがヘイズさんね」
「了解だ負けっぱなしではいられないからな」

「おそらくレーゲンが私、リヴァイブが一夏だろう」

「ラウラはセレンと一度戦ってるからな」

ピーーーーーー

「今度こそっ」

「無駄だ」

「一夏、手加減はしないよ」

「望むところだ」

ワイヤーブレードと新装備のハイレーザーで反撃を許さないラウラ

「さすがに一筋縄ではいかないか」

「お前の動きはもう見切っている」

回避する先々にワイヤーブレードが襲ってくる

それを紙一重で回避するセレン

一方一夏とシャルはというと
「はあああああああっ！」
イグニッションブーストで一気に距離を縮める
「（前より動きに無駄がない）」
「零落白夜っ！」
一気にシャルに切りかかる一夏
「詰めが甘いよ」
器用にかがみ一夏の攻撃をかわしてその勢いでグレー・スケールを一夏に叩き込んだ
「ぐぅっ！まだだ雪羅っ」
「！？っ」
一夏のカウンターもシールドを切るだけで本体にはダメージはいかなかった
「一夏っ」
白式のギリギリをレーザーがかすめそのままリヴァイブに命中した
「セレンかっ？」

「まんまと分散されてしまった」
一夏とセレンは背中合わせになり守りを固めた
「厄介だな。どちらも一発逆転の一撃がある」
「気を抜けないね」
シャルが後衛ラウラが前衛で一気に勝負をかけた
「一夏は下がってろっ」
【ジークフリートシステム起動】
ワルキューレが黒い鎧に包まれていく
「第2形態移行」
その瞬間ワルキューレの背後に翼が現れた
「第2形態移行!?」
「なんだあれは」
(来いバルムンク)
突然ワルキューレの前に巨大な剣が現れた
「速攻で終わらせる。一夏リヴァイヴは任せろ」

翼から無数の自爆誘導兵器放たれた

「散れー」

「数だけ多くってもっ」

ガルムとレイン・オブ・サタデイで次々に迎撃していく

「シャルロット後ろだ」

セレンがいつの間にか背後に回っていた

「終わりだ」

とっさに背後にシールドを展開

「そんなシールドでぇ」

シールドがいとも簡単に破壊されていく

「この間合いなら逃がさん」

「それはお互いね」

盾のの装甲がはじけ飛び、中から《盾殺し》が現れ左手を突き出そうとした瞬間

ワルキューレの背後から出てきたアームが左手を受け止めた

「惜しかったな、だが詰めが甘い」
≪バルムンク≫がシャルを切り裂いた
「シャルロットがこうも簡単に」
「俺も負けてられねー零落白夜っ」
「止めてしまえば意味はない」
「コンビネーションってのは一緒に攻撃するだけじゃないんだぜ」
咄嗟にワルキューレを確認するラウラ
ワルキューレが大型グレネードキャノン≪雷電≫を構えていた
「ラウラどうする？」
雷電からグレネードが放たれた
ラウラは咄嗟に一夏へのＡＩＣを解除して回避行動にはいった
グレネードの爆風で一夏とラウラが吹っ飛んだ
「うわぁっ」
「なんて威力だ」
体勢を立て直すラウラ

（直撃は避けなければ）
「はあああああー」
頭上から≪バルムンク≫を振り下ろすセレン
「動きが単調だな」
ＡＩＣで≪バルムンク≫を受け止めたラウラ
セレンが不敵な笑を浮かべた
（しまった）
爆風で白式をロストしたラウラは咄嗟にレーダーを見た
「頭上！」
「おおおっ―」
流石にラウラでも二人同時に受け止めることはできず
勝敗は決まった
「試合終了」
「負けちゃったね」
「ああ、しかし流石私の嫁だ」

親が子供の成長を喜ぶようなラウラ

「やったなセレン」

「そうだな」

「今、笑った？」

「私も人間だ笑いもするさ」

セレンが一夏に初めて心を開いた瞬間だった

第九話・一回戦！ワルキューレの真の姿（後書き）

長々書いてしまったが今回は結構満足できた話です
今後も読んでいただけたら嬉しいです

そしてアシュリーの専用機名どうしよう？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6480r/

インフィニットストラトスの斜め上いく物語

2011年10月8日21時14分発行